

7 3
門 4
號 367
卷 1

四季料亭

相より射藝をかこしめら馬との二匹ありて

其教多くを法式さへしりしりおの

古書あり昔鎌倉將軍頼朝卿の時下河

邊莊自行平諏訪大夫盛澄以てそれ藝ふ

長しその古實よく知りしりり

りやそれ時ふ古より有るあり射藝なり

更ほその式を定めしりそれ造物な

ごころからしりしりそれ思えりるそれより盛

明治三六年十一月十九日

市島謙吉

氏寄贈



そとれ出づ人の眼もあきなきを疑わさるん
うさねぞ私の造らるる中もあらざるものか
あまゆきれば強しとやありおとぎも何ら
以抑今の世末小室系家ものやうりおとぎも
あつちた古傳のまゝありや又ハ古も習あり
事とありや今の執ハ予が嘗てあつちたもの
きハ福ざんあ古傳のまゝある古實の片
ちを述ぶれりあり

安永七年戊戌四月

伊勢平藏貞丈

四季抄を扱ふる意をゆゑ
四季抄を伊勢貞丈主れ著述なりこの翁公家が徳武家
の故實の学よりありあつちたものか
一書の何れと多うも中れを世人大うハ知り
ぞれまハ今さらしおのれこの翁の学風を志
ち一とてこれに同くれ書されたる書籍も
あハる一のやなちをあらわすに思ひ
るあつちたかおとぎもあつちた色ぬるま
江戸も来てハおのつちらあつちた目も
てを月の本さるるものか

○四季抄概言

志き方に志しむるは...
米儲多支とて...
許され...
板子...
る...
カキ
アラタ

紀の殿人

天保八年十月五日

長澤遠彦侍様

四季艸一之卷 春草上

射藝之部

- | | | |
|------|--------|------------|
| 弓矢始 | 神代弓矢 | 弓、両頭蛇かごりて作 |
| 弓本地 | 弓、多きと云 | 神代四弓 |
| 一張弓 | 八張弓 | 九張弓 |
| 十張弓 | 丸木弓 | 檀弓 |
| 梓弓 | 梔弓 | 槻弓 |
| 拓弓 | 栗弓蓬矢 | 桃弓葦矢 |
| 雷上動弓 | 真卷弓 | 重藤弓 |

塗籠藤の弓

糸はくまは弓

ふし巻の弓

ちほ弓

弓の名所

弓は鳥打

弭冠

打あけ打おこし

弓鞭おどに樺を巻と云事

おのぶたかぞり弓矢寸尺

矢束長さの事

貴人の矢を御調度といふ事

柳を矢籠み用ふ事

ぬと筈 同追加

上ざし中ざし

躰矢

征矢

石打征矢

野矢

えり望矢

ふしうげ

黒津羽

あまは面

あまきりまね

一手四目

的矢紙もき

矢の羽をひきやうはあみ取せといふ事

まろもね

水破兵破の矢

神頭

神通れいぶん

雁俣の名

まかり万こ

丸根

まがく 舟定角

矢ごし矢さげん

墓目

墓目寸尺

大具足は引目

宿直引目

ゆんから引目

通計六十二條

根の國 根の國と云ふ田舎此事形也 追ひ下りたる時素戔嗚尊いと傳ふ
天照大神の御もやと云ふなりと聞えしを國城奪は
む多きなり來るあらむと疑ひぬを是を防がむ為の謀ふ
天照大神ハ女神形多き也男此裝束成着ぬハ矢を負ふ弓
を持ち弓彌ユハを振起フリキてちから足城ぬ武勇此まがら城あら
りて素戔嗚尊の來りぬを待ちぬといふ事日本
紀の神代卷に見えり此時天照大神既り弓城持て矢
を負ふぬハ一と何きん其よりを猶前かより弓矢ハ
あを來りり形多し弓矢城始り作て出りぬ神
の御名ハ何の書も見え終る詳なり

神代の弓矢此事

神代の弓矢ハ天鹿兒弓天鹿兒矢天梳弓天羽羽弓天羽羽矢
生弓矢大弓等の名日本紀古事記等に見えり此等の弓
矢の制さるる諸説ありて何き城正説と定
めがらし神代の弓矢ハ後世に傳りたる也其城見た
る人ハ皆推量此説あるゆゑ諸説同くあらばあを
知事ぬ事ハ知れぬと置る

弓ハ兩頭の蛇をかくと作るといふ事

弓ハ昔兩頭の黒き蛇城かゞりて作て始たり上下の弭ハ
蛇の舌を出したる形あり弓城黒くぬる城本と云ふハ黒き蛇

の色あり。弭を赤くぬる。或本とあるハ。舌は色なり。弦ハかの蛇
ふくむ玉弦入るる形なりといふ説あり。此説室町殿の時代記
―たる。小笠原家の古傳書ふも見え。古き俗説なり。用ふ
ず。昔とていつ頃を指して昔とていつとある。何の故と
よる。兩頭の黒蛇なり。誰人の志ざらば。何れ書
ふも見え。出所もたれば俗説あり。むか。漢土に樂廣といふ
人あり。其人此家客人來り。酒飲進免。角弓弦
壁に掛て置たり。客人此酒を受て持て盃の中に。か
角弓の影うつり。客人見り蛇なりと思ひて。心よから
むと思ふ。其酒飲て歸り。後病れあり。つづら

といふ事。晉書に見え。蒙求も其事見え。又本草
網目の兩頭蛇の注。越王の弩弦の化を所なり。これを越
王根首蛇といふ。彼是。合せて造り出
したる俗説なり。

弓本地の事

弓は本地ハ。無量壽佛の形あり。故に慈悲の相を本とて。然れ
ば佛の字も。人弓引は三字弦一々に作るなりといふ
説あれ。用ふる事あ。別れ本地といふ事あり。志
志。梓檀椶柘黃檀等の木を。弓は本地
とて。是も弓弦作る木あるゆ。弓は本地あり。佛像

はく弓ハ作らるゝなり。又慈悲の相を本と云といふも心得
がこし。弓も生類ヲ射殺す以て。弓は徳と云ふなり。慈悲
の本と云ふ射殺す事ハ形らば。何の用も立ぬ器と云ふなり。
あやうし説ハ。出家あとのいひ出して。昔は愚昧の武士
小教をも形也。弗の字ハ弓引の二字成合を云ふなり。弓
ハ弓まあらざ。ハ引よ何らば。篆書よ云ハ違あるなり。又
佛の字ハ佛法の字ハ唐土に渡り來らざる以前よりあり
一字を繁ホトケ成天竺の詞めてんフトといふを。其詞ハ
付て。唐土にも。或ハ浮屠。或ハ佛陀の字成以て當たるなり。
ト音通 佛陀を下畧して。佛の一字をも用ふるなり。我國に
てホトケといふも。浮屠家なり。又佛陀家なり。ト音通
ト如音通 べく我國の故實也。佛の事を取らば。いふ事あるは
る事あり

弓成るる事といふ事

弓成るる事といふ事ハ。天竺の貝多羅葉ハ其長七尺五
寸なり。弓の長も同ト事あるゆゑ也。弓成多羅枝といふ
事。一條兼良公の御作也。書。公事根源に見え。多羅
樹の枝を以て弓成作也。始る。多羅枝といふも書た
るも然あり。これ皆ゆる俗説なり。用ふる事あり。多
羅舊名ハ貝多といふ。是天竺國の詞なり。唐土に詞に翻し

てハ岸形ガシケイといふあり。多羅樹ハ梭櫛シユロの如く直なり高し。至極高きハ長八九十尺も有り。花も黄米アハ子の如し。又高四十九丈あるもあり。翻譯名義集に見えり。又高ハふ七尺五寸計の小き樹ハはあらん。又多羅樹を以て弓城作ミ始ハりといふ事。正ハしき書ハも曾て見えり。事ハされバ弓城ハもいふ事。又ハ多羅樹の事より出ハり。何ハらざる事を知ハる。又一説ハ神功皇后三韓攻ミたハひし時。御弓城執ラをハみひく。御手ハあまハたり。御名手タ荒ラ姫メ命ノと申奉ル。御弓城ハもいふ。用ハふ

る事ハかかれ。神功皇后三韓攻ミめハる。以前より。御名オキ長ナ足ガ姫タラシ尊シと申奉ル。日本紀を見ル知ル。御手アの荒アまハり。手荒ア姫メ命ノと名付ル。又御手ハあハれハる。事。正史實録ハも曾て見ル。事ハなり。又御手ハあハれハる。事。古書ハも證據ハあり。事ハあハる。甚ハ妄説ハなり。弓城ハもいふ。事。古書ハも證據ハあり。事ハあハる。歌ハ。御執ミト乃ラシ梓サ弓ノ之ノ奈ナ加カ弭ハス乃ノ音オト鳥ス奈ナ利リといふ詞ハあり。御執ミの二ニ字ジ城シみミといふ。事。天子ミ比ヒ御手ミ執テらラせラる。梓サ弓ノといふ事ハ本ハにハり。あハれハる。トトとトと音オト通トじハる。事ハなり。事ハあハる。詞ハ轉ル。

たらししとをいふ形也。弓ハ手ニ執るものなるゆゑ。御とら
しといひ。太刀ハ腰ニ佩く物なるゆゑ。御をかしといふを
同じ例なり。

神代の四弓此事

神代の四弓といふを。前ふ記したる。天照大神の持多は
一弓を。坐陣弓といふ。葦原此中國の邪鬼をけらむ平げ
とく。高皇産靈尊の天稚彦小賜ひし弓也。發向弓といふ。
皇孫の降りし時。諸神の執りし弓を。護持弓也云。
彦火出見尊此狩の時持りし弓也。治世弓と云。是を
神代の四弓といふ也。此説用ふべし。此四弓の名目。日本

紀の神代卷。古事記をばに曾て見えざる事なる也。後より神
道者此輩名を付た。もれ形也。神代の弓右の四弓のみ
あり。大己貴命の生弓矢大弓あどの事也。古事記に
見えざる。

一張弓の事

近世一張弓といふ事をいひ出して。是天照大神の弓。彌を
振起りし時。の弓ありとて。繪圖あり。其圖は見るに。外
竹を朱漆ニ塗で。前竹は黒漆ニぬを。握より上。三十六所
藤卷。地の三十六禽にかし。又大日經は三十六童
子。又握より下。廿八所藤を卷て。天の二十八宿

よかゞ少くも。又法花經の廿八所よかゞと云。弭ハズ此形斌を魚の尾孔形の如く作ふ。又一説の一張弓ハ上下の弭ハズの形を龍の頭ハズみく。舌狀出して弭ハズとす。是を蛇頭弓と云。是を神功皇后此御弓の制表形と云。又神代の弓ありと云。又右兩品とも。曼茶羅マンダラ弓とも名づく。是皆偽作物と云。用ふ事大なり。廿八宿三十六禽あやむ事。神代卷なと。よか見えむ。應神天皇の御代。始て文字渡り。それをも以後。天文陰陽の書とも渡り。大日經。法花經など。神代ふハ形。欽明天皇の御代。佛法始り。渡り。後。さぬぐ。此佛經渡り。是にて偽を考ふべし。

又龍の頭を作り。蛇頭弓と名付。龍も蛇も同。そのと思ふ。や。愚なる事なり。笑ふべし。

八張弓の事

八張弓ハ。神代此四弓といふ事のあるに。八張弓といふ名を立。太平弓。蛇形弓。羅形弓。相位弓。肆足弓。陰陽弓。福藏弓。世平弓。是形也。是ハ小笠原家あて定。此形也。されども室町殿此時代。記。置た。小笠原家の古傳書の中に。一張もその名見えむ。た。當家弓法集。世。三議。一統と云。此中。首實檢の作法を。條。弓を太平弓に。然。其頃既。

八張弓の名ハ定^レル^レ何^レヤ^一。普^ク世^ニを^モ知^ラら^ズ。其^レ時代^ニ此^レ書^ニ記^スル^レ其^レ弓^ノ名^々を^モ書^クの^セ也^一。八張の中^ニは常^ニ用^フる^レ弓^トり^シあり^テ名^々を^モ別^ニ付^テたる^レ也^一。其^レ別^ニ名^々は古^キ書^ニは載^セズ。太平弓^ノ名^々は弓^ノ法^集に^モみ^エる^レ也^一。

九張弓の事

九張弓^トも重^シ藤^ト此^レ弓^を九^品あ^つて^も其^レ何^レ也^一。是^ハ八張弓^出來^た後^ニ又^此名^々定^まる^レる^レ也^一。

十張弓の事

十張弓^ノ事^一。十張弓^之卷^トい^ふ書^{あり}。十張^トい^ふ書^{あり}。作^形

此の事正三記
くはく見え
あり

弓^ニ紫^ニ話^ニ弓^三。篋^ニ弓^四。腹^ニ形^ニ弓^五。弦^ニ音^ニ弓^六。羅^ニ形^ニ弓^七。流^ニ弓^八。水^ニ早^ニ弓^九。刺^ニ龍^ニ弓^十。白^ニ桐^ニ弓^一。是^レあ^る也^一。此^レ十張^ノ製^作レ^ル式^を記^ス。又^外ニ^十三^ノ條^ノ弓^矢ノ事^は載^ス。終^ニに^應永^廿四^八月^十有^五日^小笠^原備^前守^持長^同民^部少^輔持^清寛^正五^十月^日多^賀豊^後守^高長^同豊^後守^高忠^と記^ス。次^ニ年^月な^る也^一。水^嶋ト^也之^成伊^藤甚^九衛^門幸^氏と^記セ^リ。小^笠原^多賀^等ノ名^を記^タレ^ドも^偽書^多也^一。水^嶋ガ^例ノ妄^説あ^る也^一。十張^レ中^流弓^ハ柳^みく^作也^一。白^桐弓^ハ桐^みて^作る^也い^ふ也^一。柳^も桐^も弓^材と^ある^也古^書に^曾て^あり^し也^一。又^通矢^ノ事^は記^ス。應^永寛^正レ^頃通^矢と^云事^{あり}。其^外小^笠原^多賀^ノ記^と違^たる^事何^レ也^一。然^るも^十張^弓ハ^水嶋^ガ

以下弓材なる木の葉状等此考
冬草ニ記アリ
檀弓古事記
實録延喜式
葉集古今集
外古書ニ見え
あり

ふ甲の歌アリ。生ひはづる系真木の丸木此弓也。まをさる
よりちちからしを阿れ。こよをさる。真木の丸木此弓といふ
はまゆみ此木の弓なる也。みだりの邊ふてはづるを直
あるよりちち力あるその形也。丸木弓削て引く試志るべ
し

檀弓の事

檀弓ハ真弓此木みる削た丸木弓形也。漆ぬらむべし。
白木のよりふる用ふる也。白檀弓といふ。白真弓と書てを
同くもなる也。やゆこの木のはづるの弓此木といふ事
て。真弓の木といふ習り。たるとなる也。此木の木理細ありて。

梓弓古事記三
代實録延喜式
万葉集古今集
其外古書に見
えり

性強を志形やかあり。弓の材めと甚宜し。木あり。さて
こそ真弓の木こそいふ形也。和名抄ニ檀和名万由三とあり。
葉のまほつたきの如く。葉は先丸くして。身をまつたきの葉と
も大なり。葉厚くして。身木も玉つたきふ似あり。皮は
むげの内に白さある皮阿也。此あま皮して矢の羽に上た
ぎ下はぶをまへ。皮かいをさる云なり。身木皮削きむ色白
くして。うはぎまの如し。十月頃實をむむぶ。その實四
かぢあり。四つにわく。中に赤黄色なる粒阿也。葉先いさか
こもあり

梓弓の事

梓の木に丸削た丸木弓あり。あづこ。江戸あづこ志わく

梔弓日本紀小
見えり

とも木さうがうといふ木あり。和名抄に梓和名阿豆佐と
あり。葉も身木も桐に似たる

梔弓此事

梔弓ハ黄櫨の木ふく削た丸木弓なり。たゞ弓に梔字は
用ゝる。古代字の用ひ違ひある。物を染むに梔子みて染
たる色も黄櫨みて染たる色も共り黄色なる。ゆゑ混雜
して梔子染をも黄櫨染と通称して梔もはげとよむる
あづしはげといふ。梔の字は本訓ありあつて和名抄に梔
子。和名久知奈之黄櫨。和名波通之とあり。波通之は中略して
波之ともいふ。梔ハ弓材にあり。黄櫨ハ弓材に用ふ

梔弓延喜式三
代字録其外古
書に見えり

る形也。今世の弓はむらり用ふるも黄櫨あり。黄櫨ハ漆木白
膠木胡桃木あづしに似たる。葉の形も似たる。はげともあづハ歌
ふよあり。はげとよく紅葉する木あり。はげとよを田舎詞あり。はげ
とよははげとよ。黄櫨木を切て見まを。其木口外ハ白くして内
は心ハ黄なり。其黄あり。心を以て弓に削るなり。染物ももみ
丸を用ふる。な祭里に生る。山に生る。山に生る。山に生る。性
宜しきといふ。是は山をせといふあり。山をせハ身木直に
一體のびやかま。是を弓材とす。

梔弓の事

梔弓ハ梔の木ふく削た丸木弓なり。和名抄に梔和名

豆木乃木とあり。つぎ此木と。けやれの木と。同トヤリある。此
みく見とをがし。相摸國大山の和入此いひ。いつきの木と
バ。弓此木ともいふ。ちや此木と似く見分がせり。木成削り
て見きを分る。けやれの木と。堅く木理とあるなり。此
きの木は。堅く木理成横よりなる。木理あり。さねを田舎
小く鋤の柄は是を用ふ。甚強く。折まをといひり。
又植木成高ふ老翁のいひ。いつき此木とけやりの見とを
がたり。夏の炎天と見とけやりのあり。夏の日でも。けや
りの葉は。兩端上へ少く。その上より。葉中へほみある。さ
ね。つぎ此木の葉を平らより。雨の端をを上らむ。是を以

て見とく。ありと。いひ。櫛の字。けやりと訓成付たる字
書あり。これ誤なり。

柘弓三代實録
延喜式等
見えり

柘弓の事

柘弓ハ柘此木みく削りて丸木弓形也。和名抄云柘豆義と
あり。つぎ一名野菜とも。山菜ともいふ。葉み似る。木を
葉柘とて。葉と同類の木なり。葉の葉ハ切まらむ。所あり。
柘の葉ハ切こみ。所あり。丸く。葉少く。阿也。葉柘
とりに蚕み食り。むらり。

桑弓蓬矢の事

桑の弓蓬の矢此事ハ禮記の内則此篇に見えり。是く男子

の生々々々時礼祝。桑の弓に蓬矢六つを取る。天地四方
成射るなり。其子生長して。武功を天地四方にあつて。さ
き事を祝む。射る儀なり。蓬の莖ハ弱く軽き物なれば。そ
れハ應じて。桑の弓之細き葉は枝を以て弱く造る。形亦
し。桑弓蓬矢我國に入用の事なり。平家物語。安徳天皇
御誕生の時。重盛公此事成行なり。由を云ふれども。物語の
うづりて書たふ。ふもや。あつて。むね。た。つ。つ。な。る。事。なり。朝
廷。此。事。行。た。り。事。國。史。あ。ど。み。見。え。ぬ。桑。弓。蓬。矢。の。事。
を。甚。の。秘。事。あり。さ。る。さ。る。さ。る。さ。る。さ。る。さ。る。何
ん。以。て。秘。事。と。し。り。や。や。心。得。り。た。事。なり。

桃弓葦矢の事

古代ハ禁中あり。十二月晦日追儼ツキナを行ひ。追儼ハおに
や。ら。ひ。あり。大舍人といふ官人。四目ある。た。を。ろ。し。き。假。面
を。け。戈。と。楯。持。て。鬼。追。り。ち。と。なる。是。を。方。相。氏。と
名。け。殿。上。の。人。桃。の。弓。葦。矢。を。以。て。鬼。追。り。射。る
事。也。是。疫。鬼。追。り。た。ゆ。え。あ。ひ。形。を。疫。鬼。と。し。疫。病。神。の
事。なり。葦。の。矢。の。輕。く。弱。き。もの。なり。それ。に。應。じて。桃。の。枝。に
細。く。弱。き。枝。以。て。弓。を。作。り。射。る。事。也。強。き。弓。めて。え。
方。相。氏。疵。を。う。り。ふ。さ。し。ふ。い。ゆ。た。る。事。也。ゆ。え。強。き
弓。矢。ハ。用。ふ。に。及。ぶ。事。なり。

たは弓の事

正月男子のもてあそびに、たは弓射事ハ、邪鬼退治を
るに表相なり。たはと破魔と書く。魔を破るの義なり。と
いふ説あり。さも有べきやうに聞ゆべきを、たはに正説
あらざれば、たは弓射事といふ。昔ハ京にも何方にも有し
事あざればとも。今ハ絶てたが、その弓矢を賣り、童に
りてあそび物とせむの事あり。されども遠國にも其
たはれ今ハ残まらぬ。土佐國の人此物語り。土佐國畑とい
ふ所の山中の民家あり。正月ハ幼童たは弓射事。的を
蒿繩ワラナハを以て作る。其形圓座の如し。徑ハ壹尺ばかり。其中ハ

徑二三寸の穴あり。是を名付てたはといふ。射手弓矢を持
て一列に立並り待時。一方よりかたはたはを轉マユり走らし
むるを各射事なり。たはの穴を射る候ゆりとも。あはた
は走り終まると、又一方よりまらび返して各射事なり。
たはをまらびたは事ハ、射手の中より、うはらび出てま
らば、たはに。是をたは然射るといふ。まらび大和國吉野郡
上市村の人此物語り。大和ふらたはを射る事右の如し。大
和といふたはを射るといふ。たはを射るといふ。はたはを
はたといふことなり。土佐の人、大和人のいふ所同ト趣
たる。然まらびは、ハ的の名なり。破魔ふら何らだかし

今^レの細射弓箭といふ文^レ引^ルるに據^レるに按^ルふ。是^レに
細射^レに細の字を^ア鹿^キ不^レ對^スる。細の字と^レて丸木弓の製^レの
鹿^キ畧^スる^ルに對^スる。木竹合^セる^ルの弓製^レに細密^{サイミツ}と^レて以^テて。
細射の二字^レ成^レ萬^ク岐由^レ羨^ニ宛^ルる^ルに^レ延喜式^ヲ見
え^ル。麻^ハ岐^キ鏃^{ヤサキ}ハ萬^ク岐由^レ羨^ニ具^ズる^ル矢^ナる^ルに^レ延喜式^ヲ見
た^レ按^ルふ^ルに^レ木弓^ハ的^ヲを射^スる^ルに^レ宇治拾遺^ヲ。
門部^府生^トい^フ人^常に^レ好^ムて射^ルる^ルに^レ能^ク射^ルる
由^聞え^ル。賭射^{ユミ}の射^手に^レめ^スる^ルに^レ事^見え^ル。又^次將^裝
束抄^ノ射^禮賭^弓弓^場始^ノ條^ニ。束帶^弓矢^成相^具也^{。真}卷^弓
矢^{あり}。件^ノ弓^に鞞^{トモ}懸^ユ成^付と^見え^ル。や^ハ和^名

抄延喜式等^ニ見^える^ルに^レ木竹合^セる^ル弓^も。上古^{より}あり
て^レ。木^弓ハ雨^露不^レ志^スる^ルに^レ受^テる^ルに^レは^レあ^る。
ゆ^ゑ軍^陣に^レは^レ用^ヒる^ルに^レ。的^ニは^レ用^ヒる^ルに^レ。丸^木弓^ハ軍^陣に^レ專^ラ用^シる^ルに^レ。
木^弓ハ軍^陣に^レ專^ラ用^シる^ルに^レ。

重藤の弓此事

前^みも記^を如^く。上古^ハ軍^陣に^レ丸^木弓^ヲ用^ヒる^ルに^レ。的^ハを^レ用^ヒ
る^ルに^レ。東^鑑に^レ重^藤の^名見^える^ルに^レ。源^平
盛^衰記^ニ。重^藤の^名見^える^ルに^レ。是^ハ後^ニ書^カる^ルに^レ。
る^ルに^レ。其^頃見^える^ルに^レ。書^カる^ルに^レ。知^ラる^ルに^レ。

一のきふりぬぎ重藤の藤ハ白藤ぬぎ弓をぬ黒くぬぎな
古傳書にゆふ所皆同じ

塗ごめ藤れ弓の事

軍陣聞書 永正八年ハ八木若狹守 云藤ハ白きこの本なり。塗
忠勝が記ヤ一書あり

ごえ藤といふも重藤の上城赤うほにぬぎぬぎぬぎ
ゆふぬぎ惣一漆ぬぎ藤の上をぬ事畧儀あり 赤うほ

朱うほの事一あらぬうほ一ばぬぎぬぎぬぎ黒赤き色一な
る城のぬぎ引目あらぬ赤うほ一ぬぎぬぎ同し事あり
朱うほ一城用ふぬか
らぬぬぎあり

糸裏の弓れ事

糸裏の弓といふハ麻糸を疊の表成織りぬ糸を少し

細く丸よりぬぎぬぎ本筈よりうらぬぎぬぎぬぎ間も

あを巻くをぬぎ一ぬ漆二小麦れ粉を交てぬぎ合

弓に付る糸成巻たるも其上り地をぬぎ一直二黒漆ハ

ぬりて其上にせんぶん巻矢を藤成巻て其間小所に

藤を巻たり先年相摸國大住郡矢名村の民家に代々持

傳え古れ糸はぬぎの弓何也一城ありぬぎ家藏

とぬ其製右にゆが如し軍弓みぬ甚よぬ一ぬぎ

糸包弓義經
記小見ゆ

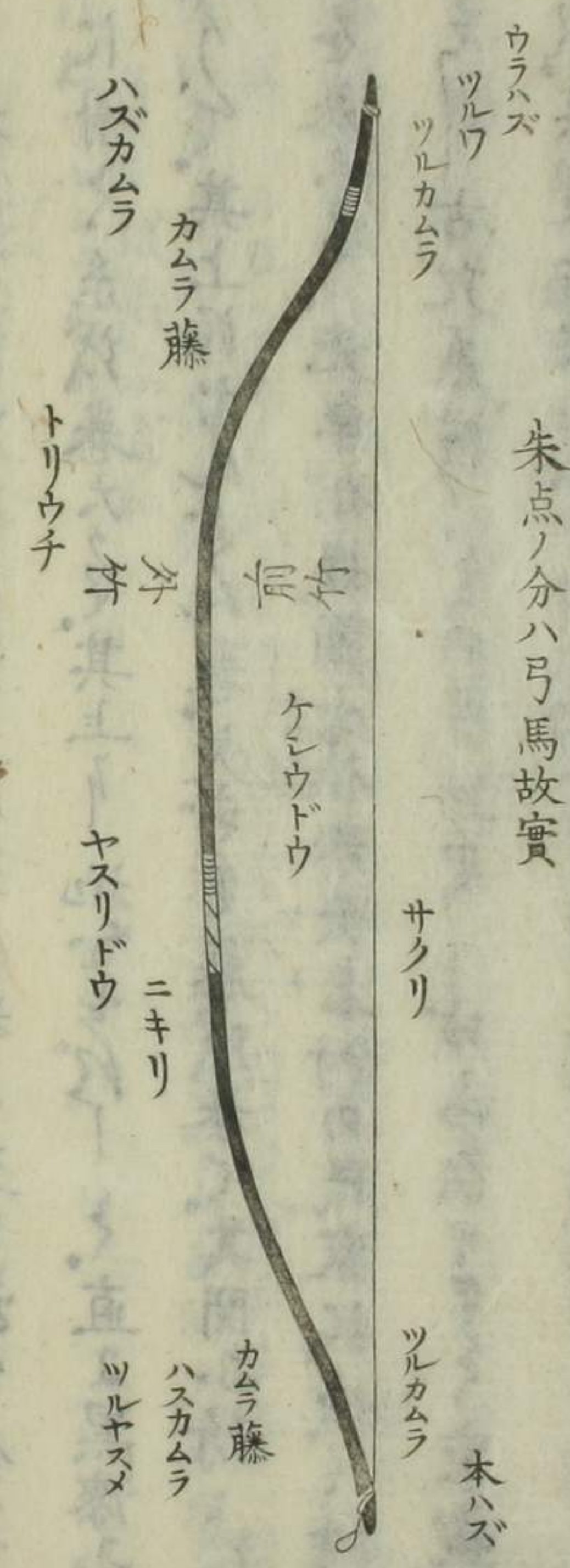
節巻の弓れ事

弓ハ節の所厚たぬ多くと節の所うき上ぬぬにぬ

弓のそのたうり。その用心の為。節の上成藤あまき巻き
あをぬ。卷の弓とゆふあり。岡本記に見えり

弓の名所此事

朱点ノ分ハ弓馬故實



右名所の圖ハ寶徳元年十二月十八日小笠原備前守持長
名法

浄の記さゆ。書に見えり。是射手方ハ用ふ名所
 又近世板行の書。武用辨畧。并武家重寶記ナ。弓の
 打ミりうちノへんといふ事。前記ミるがゆ。其あハり。を
 うちとゆふなり。されど大小ミりうちミりけミりゆふ
 にか。鞞付手キナカ下関板キナカ弦持木半等キナカの名あり。是等ハ弓工ユミシの用ふ
 名所ハ。射手方ハは用ひざる名所なり。射手方ハて
 ハ弓工ユミシのゆふハり。名所ハ用ふハき事ハなり。射
 手方ハもハ入用ハにハき名所ハれハなり。右の内木半と
 いふ事ハ射手方ハといふ詞ハ。側木ソバキの所ハ木ハあハといふ
 形ハ。高忠聞書ハ。矢ハ限ハて。二ハふハ矢ハはハ長ハくハ

て矢づの巻とてほくいをれハかづらみさハけさうの物
其外大事の物をららざら射ぬ事なり。我矢束を以て弓は木
中へひつかく。わづよまをて本儀ありといふ。木中ハ
射手方れ詞あり。近世ハ弓工の詞ぞくらう此詞。鎧工の
詞を。武士の用ふ事多し。能分別して。工匠あどの詞を
用ふまじき事なり。

弓の鳥打此事

弓に鳥打といふ名所のあき。天武天皇と大友皇子と御
位をあらそひの事。時大友皇子怪鳥を射て飛來て。天
武天皇成蹴殺さんとあき。時天武天皇御弓成執る。此

怪鳥を打殺しといふより。鳥打と名付たりといふ説あり。
然るも此事日本紀其外の正史實録に見えざる事。あはれい
ふ。一説なり。神代ハ天稚彦といふ神を
て。葦原中津國の惡神成征伐せし。大將とあり。下しむ
し。天稚彦征伐をせし。て。下照姫を娶りて。國成奪
いんと。惡神退治する由を申し。高皇
産靈尊いづ。思召て。無名稚成は。のほり。ありさ
す。成見を。天稚彦弓を以て。無名稚成打殺す。是より
鳥打の名始まりといふ説も。何れも。是又用ふ。矢を
ら。日本紀此神代卷。天稚彦天鹿兒弓天羽。矢成取て。

無名雉を射て斃コロまるとあり。弓矢以て打殺と見えぬ。右の説妄説ある事を知シ。按ずるに鳥打といふは、伏鳥フセドリを射るより起すこと名取とす。伏鳥といふは雉鶉の二なり。雉にても鶉にても草むらうに阿る矢其めぐるに馬を乗せ廻さむ。鳥飛あがらばして伏しかばよるなり。かくふせあさむ。射る由急ふせ鳥といふ。射やうに高忠聞書ふとえさる。鳥成射るに矢所よとる。死まむらうに飛揚アガふ事何ぞ。其時弓と以て鳥成打落を由急鳥打といふるべし。夫木抄り。信實朝臣の歌。うづらから秋の草菰の何川さ弓。ちやとせり。ちれ名も我志と見えさる。是れみ考

はし

弭ハス冠カサの事

弭ハスむとて毛を皮とも云ふ。革みて袋をぬひて。弓はうらむとて不掛る物あり。是ハ神功皇后三韓成征伐志のむむとて。筑紫に至るのひし。時御懐胎してたをり。くさる。俄不御産氣催したる。御弓の弭を陰戸にさし入ぬひたれ。御産の氣志づまり。征伐此後筑紫へ歸らるをぬむと御産何れ。其御子の應神天皇即八幡宮の御事あり。う此陰戸へ御弓弭ハス成ハスをさし入る。をかくごりて。弭冠を懸るといふ説あり。甚妄説なり。用ふる事あり。日本紀

ふく皇后御開胎ふ當りしうば石を取る御腰にさしはる
みく祈りてふ事おちりて歸らん日此所ふる産まぬ
と仰らましとぞ其石今に伊都縣の道比邊にあまうし
見えしり陰戸小弓弭さし入るる事正史實録に
曾て見えざる事なれ弭冠何の古事も入らば弓を壁
に立の事置りし沙土もろ弭比磨を損ぶべき事成れそ
れさかいら人のあいら出たる物なるべし又
弭冠に革もろ龍比頭成作り龍の口へ弭を入るやうに
あいら志なり弭皮と名付て其製作成極秘傳あり
といふ輩もあや妄作あり古書に曾て見えざる事

大々用ふる事あり

ウキアゲウキオコシ
打上打起の事

弓成引かんとて弓を持上る成打何ぞ打おろしといふり差
別ある事あり的出張記 永祿六年伊勢六郎右
衛門尉平貞久之記 にくちあげと
ハかち立の時草鹿丸物など射候時弓打何ぞ事成申候
うちねあしとん犬追物笠懸あしさうりて射候を申
候打何げ此少ぶろき物も候ね又犬追物聞書 小笠原
輔源元長 小笠原 兵部少
之記なり 小笠原 犬追物小打あげとん不申打おろしてと云
ねるうちおといてとん申候し小笠原家も如此いふ
なり是も引さるる故歟と見えしり

弓鞭ふごふ樺皮巻くといふ事

弓鞭其外の物も色樺を巻くといふ事古書ふあり又真樺
皮巻くといふ事もあり。此樺といふ名につまきかば櫻
の皮皮巻く事と思ふ。樺櫻の皮皮膠ふ長く継て細く
裁てそれみき巻くと云説あり。大なる誤なり。外
此木の皮をはがれみき堅くてもみき皮のき
め堅くあるがゆゑなり。かば櫻此皮皮はかば横は
かばその形皮のきき横ふあるがゆゑなり。されば
糸もさも藤ふても紙にても物を横く巻くとかば櫻
の皮此身木を巻たるとかばさくあるがゆゑ樺を巻くといふ

形も物ふたりて藤を巻くといふ。紙を巻くも何れ糸を
巻くも何れ皆ふ紙樺皮巻くといふあり。公家にて隨
身持弓あり藤を巻きたる如く紙を巻く事あり。
装束抄ゆり見えて紙ハ真の樺皮あらばそれ
對して藤を巻く事皮真樺と云ふあり。矢は樺を皮とい
ふもさか櫻の皮も巻くといふ。はゆゑの何れ皮に
て巻くあり。宇治拾遺皮巻きを弓所に見えり。
皮ハ樺を糸假字にさかといふを傳寫の時誤り
皮に書り形也

これのがたかばさか事

の大小相應此寸尺みたるなり

弓矢寸尺の事

延喜式の大神宮式神寶の條云。梓弓二十四枚。長各七尺以上。八尺以下。とあり。同兵庫寮式云。梓弓長七尺六寸。楯ツミ檀ニユミ準ズ此ニとあり。吉部秘訓抄建久二年閏十二月十日。弓場始の條云。黒漆弓中弓長七尺六寸五分とあり。軍器考小見云。大和國大安寺小あり。神功皇后の御弓。長七尺餘。同國法隆寺小あり。上宮太子の御弓。長六尺餘。山城國静原シヅハラ二宮山王小あり。天武天皇此御弓長六尺八寸五分餘と見えり。又延喜式の大神宮式云。箭七百六十隻ヒキ長二

尺四寸とあり。吉部秘訓抄弓場始の條云。箭長二尺四寸とあり。愚得隨筆に見えり。攝州天王寺小あり。上宮太子此鳴鏑カハラの鞞カハラ長二尺一寸五分とあり。東大寺寶物圖。正倉院にある古き矢。長二尺五寸六分とあり。右上古の弓矢寸尺同し。からる。大神宮此神寶の御弓矢の寸尺何り。と定らる。神寶の外右此古に弓矢どの此寸尺も。長過ぎ短過ぎの様と思えり。何を以て定規と云ふ事。詳あらば。中古以來ハ。弓も七尺五寸。矢も二尺七寸五分と定まり。此寸尺カチ曲尺の定みあり。又吳服尺の定みあり。おたがたのけかりを以て定たるなり。おたがたのけかりは。おたがたのけかりは。おたがたのけかりは。

已が手此寸より定事杖云なり。諸書當用抄云。矢法の
 弓は最上の秘事を云。老若よりたそ此人の手みより。弓
 法と七尺五寸。矢は十二束あり。末法不知りて。尺の定に
 七尺五寸といふ。身はあふ事ま積るを。又小笠原大双紙も
 弓は我々が手みより七尺五寸なりと見えたり。我手みより十
 二束を我手
の寸に二尺七寸五分何也。右兩様共よ。室町殿の時代より記したる書あり。かくはあゆむ。此の身が
 手此寸に長き杖定むる事。甚おもしろき事なり。大を
 小人の大なる手にて定め。小き人の小き手にて定むゆゑ。其
 身の大小相應の弓矢と相なるあり。是中古を上古より射術
 精しく相なり。よよめて。此相應のつり合を考へ出して。定た

るも此形を修し。按ぎに。我兩手杖左右へ開き伸して。左
 右の手此中指の頭より。中指の頭まで此長は五尺五寸何也。
 我手此寸より。我首此頂より。足はうらまぎの長さも是
 小同じ。其五尺五寸杖半分より。杖は二尺七寸五分あり。我手
の寸より此二尺七寸五分あり。是我半身此寸なり。左の腕を右此脇へ弓
 射る如く伸し伸し。拳を握り。其拳此正中より。右の
カササキ 肩前の矢筈杖取る所まで此間の長も二尺七寸五分何
 也。是亦我半身の長なり。我矢尺なり。鞭も同
 尺あり 前云所
 此。我身此惣長五尺五寸を弓の長より。二尺七寸五分
 の矢快引のゆゑ。身の長五尺五寸に。又半身此長二

尺七寸五分を加て都合八尺二寸五分。是我弓此長なり。然
まども弓長過猶尤矢勢弱きがあらり。八尺二寸五分
の内城七寸五分縮て七尺五寸を以て弓長に定むる形也。
七寸五分縮たるハ弓に勢城持ちんが為まふべし。今世
此弓ハ曲尺の定も多七尺三寸を以て定尺とす。以川頃々
をかくたなり。さうふの詳あらば物を射るハ中^マ外^ハま
ハ射藝の工拙ふと事なれども。一ハ弓矢の長短。其身に
相應不相應よ。事も有べし。たう考ず。

矢束長此事

矢束ハ其人の手にて。必十二束あるも形也。此十二束

城おのがたかげのりにて。もの猶ハ二尺七寸五分ある也。
一束といふえ指四^ツ伏^ツあを。古き物語形也。三人張^ツ十五束
おどいふも。其矢の主^ヌ此手にて。十五束あるをいふハ何
ら也。矢此主^ヌの手も多ハ十二束あはれども。其人大男にて。
大なる手も多十二束此矢たるゆゑ。通例の人此手お
てハ十四束も十五束も何あはれり。大男にてもも小男
ももも。其主の手も。十二束より上ハ。さうもぬも此
たう也。あはれも定まらる事也。

貴人の矢を御調度といふ事

貴人の矢城御調度といふ事ハ。古へ調度といふ木みて

矢を作すゆゑなりといふ説あり。用ふ處のゆゑに貴
人の矢成御調度といふ事ハ。テウドとモテウツとモリノ室
町殿時代の古傳書ゆゑに見えたる。調度の木といふ
木も和名抄にも見えぬ。本草綱目あつても猶見えぬ。
曾てなる木あり。調度といふはまづ道具の事なり。
武士の家にもハ弓矢を以る第一の道具とす。ゆゑに弓
矢を指して調度といふなり。矢はる紙調度といふも
ある。然るも貴人の弓矢をとりやまひいふ事な
らぬ。詞を替ていひしやうの事をいふ。矢ハ調度にも
なり。

弓ハ調度に何ら矢と心得んハ必が事なり

柳を矢筈に用ふる事

延喜式の民部省式一。凡兵庫寮造箭柳筈四百廿。隼人司
油縮料二百隻。並仰大和國。毎年交易令送。箭筈以時採。乾籬取強好。
見えたり。按むに柳の木あり。矢筈を作る事。木性志
弱やかみして。軽くして宜し。是を造るに兵
庫寮はつゝ。油を縮小付て拭ふあまし。柳筈乾けし折
やまらぬ。油を縮小付て拭ふあまし。柳筈乾けし折
やまらぬ。油を縮小付て潤ホまあむ。一とを唐土
の矢を見し事あり。是も柳の木を削りて。筈に

た系も終るなり。根の方や少細し。是もては矢行宜し
か。唐土にも柳のみ用ふるに阿らむ。竹を毛用
ふる所也。此方にも古く柳を毛用ふる。竹篋の事
日本紀に見えり。今ハ竹篋のみ用ひく。柳篋を毛用
ふる人少た也。記し。た。や。た。た。矢の木とい
ふ事ある也。ナ。通音あり

ぬ。竹の事 同追加

か。づ。らの。竹ハ節。竹あり。高忠聞書に阿也。弓。法。私。書。ハ。
鏑の。竹。ぬ。竹本式なる也。阿也。又。ぬ。をの。あ。申。
た。竹。ぬ。竹の皮を残りたる也。申。た。阿也。

右節。竹といふ。ぬ。竹といふ。詞ハ替まども同事なる也。節
竹の根。竹の皮を削りて残りて置也。ぬ。竹といふ。是
を按む。ふ。唯。ぬ。竹といふ。唱誤也。ぬ。竹とい
ハ鹿の角あどの事也。和名抄り。唐韻。觶。角上浪皮也。云
を引て。和名沼太波太と注せり。ぬ。ハ。ぬ。の。鹿
だ。ぬ。角をぬ。云事也。知。ぬ。ぬ。ぬ。鏑も鹿
角にて作らる。成。ぬ。ぬ。諒。閤。箭。波。須。事。保。元
元。或。秘。記。曰。角波須と阿り。角に。竹。成。作。成。ぬ。を
といふ也。竹の皮を削り残りたる也。ぬ。竹といふ也。

箴の體は矢を中刺の事なりといふ説あり。用ふ事あるが
ま中さし一の事ハ前よま多分おゆし。體の矢も箴ごとふ
用ふるよん何らむ。箴はなり立の中ハ櫛形櫛形を矢く
なりしなり。田舎人のをさし
ては田舎人のをさし。あるにん。體の矢を用ひむし。矢搦
成する形也。櫛形おきて。おうだては底よ。直ふ矢の根を置
く箴あり。是れを矢がらみ成する時。さし矢を一つむらふ
よ立て置き。それ矢を本體より多し形をち力に。多矢
搦をさる由也。體の矢といふなり。體の矢ハ。それ征矢は中
より一つ取り用ふる形也。體の矢とく。別よ。さしなり。さしなり
は。それ形なり。さし矢がらみ。さしは。それなり。あり。秘事と

いふは。それあり。秘事と。さしは。それなり。あり。秘事と
さしは。それなり。あり。秘事と。さしは。それなり。あり。秘事と
さしは。それなり。あり。秘事と。さしは。それなり。あり。秘事と
さしは。それなり。あり。秘事と。さしは。それなり。あり。秘事と
さしは。それなり。あり。秘事と。さしは。それなり。あり。秘事と
さしは。それなり。あり。秘事と。さしは。それなり。あり。秘事と
さしは。それなり。あり。秘事と。さしは。それなり。あり。秘事と
さしは。それなり。あり。秘事と。さしは。それなり。あり。秘事と
さしは。それなり。あり。秘事と。さしは。それなり。あり。秘事と
さしは。それなり。あり。秘事と。さしは。それなり。あり。秘事と

征矢

征矢の事。征矢といふ征戦に用ふる事也。此事成りし形也。征の
字を音便し征といひしなり。又素矢といひしなり。素矢といふ常の矢也。常の矢ハ。則征戦は時あり
素矢といふ常の矢也。常の矢ハ。則征戦は時あり

て用むざる事。ゆゑよりあれば形也。射手方聞書み。
 征矢に多し人より外。別此物射る事あり形也といふ也。
 是ハ征矢の用む方此實城以爲るた。其時りのごもていふ。
 何ありとも射る事されども。元來征矢といふは。征戰
 用ふるも然るまじ。その本此意を記せし形也。さるる征
 矢の根ハ。柳葉鳥の舌劍尻槇の葉を以てありて。以て川を
 真直ある根なり。

石打の征矢の事

石打の征矢ハ。大鳥也。大鳥ハ大鷲あり。尾十四枚あり。石打
 小鳥ハ小鷲なり。尾十二枚あり。石打
 の羽に多し。然るに征矢を以て形なり。是ハ大將軍の用ふ

矢形也。されば齋藤別當實盛ガ。北國小向迄。一時。錦の
 直垂ハ。石打の征矢と云。内府宗盛も望む事。源平盛衰
 記み見えり。石打の羽も。尾の最下ハ重なり。羽なり。
 或説し。石打云。稱美する事ハ。羽此性つよれ。ゆゑ形也といふ也。
 是あやまり形也。石打ハかごりて。性法を事なり。以し打
 と云名ハ。敵をいしく打といふ事。取あり。其名詮を稱美する
 あり。いとゆふも。うほくとといふ事。形也。熟の字あり。

野矢の事

野矢ハ狩の時射る矢あり。されば本名を鹿矢と云形也。或説ハ
 野矢ハ征矢也。事ありといふを誤なり。其事ハ軍器考み能

辨ト書被バ今を以て日本紀の神代卷に彦火出見尊山の幸サキありと見えたるハ山あり狩ありて獲物多クあり
 一事を以てあり其時射多ハ一矢ハ野矢の始といふ處ニ歟
 同書敏達天皇紀ニ獵箭の二字を去ク矢とよみ來キを獵カリ
 といハ鹿成射るありと云々やと訓を付たる所也射手方の古傳書ハ野矢の云々や。法式見えず。少ハハれども詠と云々事ハ
ハハ古より定法なれがゆゑありし狩ハ山ありてはるも此ありし。鹿矢の事を野矢といふを制作の法式を去ク野の廣くして限をもたれども云々や。一丸たる心あり。野矢といふ所も鹿矢野矢イヤ當家弓法集に三議

一統の事あり 御狩場の御供に騎馬六騎ありし。出立ハ水干行膝シ、モテラ小ハ沓成を以て鹿籠の志を負て上矢あり四目をさすべし。羽をとりはるるを弓ハ思ひし。持ありと見えし。羽ハとりをさすなりといふ也。四目の事をいふはあはれ也。鹿籠ハさす野矢の事をいふ。四目ハさすをたふさす物なり。何らむ。や。や。や。ハ高忠聞書ハあり。とりをさすとん。羽の端成刈らるる。其まゝ置事なり。野矢ハ何羽を用ふるといふ定式も形。鹿相ふ。ら。ら。ら。のあ。あ。あ。ゆ。志。羽ハ端を刈ふも及ばざる所也。源平盛衰記ハ猿皮のうづ。不。志。矢。あ。や。ら。ら。ら。ら。曾我物語ハ志。矢。さ。し。

たふ竹籠タカエビラ又鶴の本白タカエビラふくまひさるるあらざりしは矢
又をうらまへむけ矢もづ高れとつては常といふるも
皆野矢の事なり 岡本記云野矢とて白籠の征矢の事なり
又寛正記みも拵方少く有之今畧之

くもり矢の事

くるまハ水鳥を射矢なり。檜此木桐の木此類の輕くし
多水よ浮くやうなる木よきかざり此如くある形あり
らへされみはちひされあまをまがらる形也。弓法秘
傳聞書よくもり此事あまがちちりしやうこそ本儀
みはされみありし何ともありし水鳥の射よきやうに
分別有るしと見えたり。くもりもむりしとてありし

もれあま古今著聞集よ。ち此國田村の郷に住人馬允何あ
しとやゆふ城のこ鷹をつぶるあまが鳥を得ててむあ
ま歸るあまあり。あまのあまといふ所よを鳥一はむい
たりきり成くもり成りちてひまり々然バ何やまは成
とてにあまをけりと見えたるを。夫木抄よ。正治二年百
首源仲正我戀ハくまを射あまは川の瀬よ。たちあま鳥の
あまはくもれし。又本間流聞書に。船ががらとひあ
くまをれや。舳箭と書て目あり。うらまも云ふなり。と
見えたり

節蔭フシカゲ此事

四ある哉。真鳥羽とある上羽を。からり。此をろをぞ黒津
羽といふなり。と見えたり。あま真の黒川羽を。源平盛
衰記に。頼政の水破といふ矢。黒鷲此羽ふてを。た。と
見え。あ。う。れ。り。此黒をろよ。は。ご。り。た。う。あ。は。り。
即黒津羽なり。

あま此面の羽此事

あま此面ありて。あ。ま。と。ご。り。る。矢の事。平家物語の長門本。太
平記等に見えたり。世ふ矢羽の繪圖あま。何。と。そ。れ。く
あまのれ。ま。て。此羽見ゆれど。彼是。あ。ち。く。み。り。同。し
う。ら。ぞ。何。ま。を。是。何。羽。を。非。也。と。定。が。り。予。が。友。山。岡。後

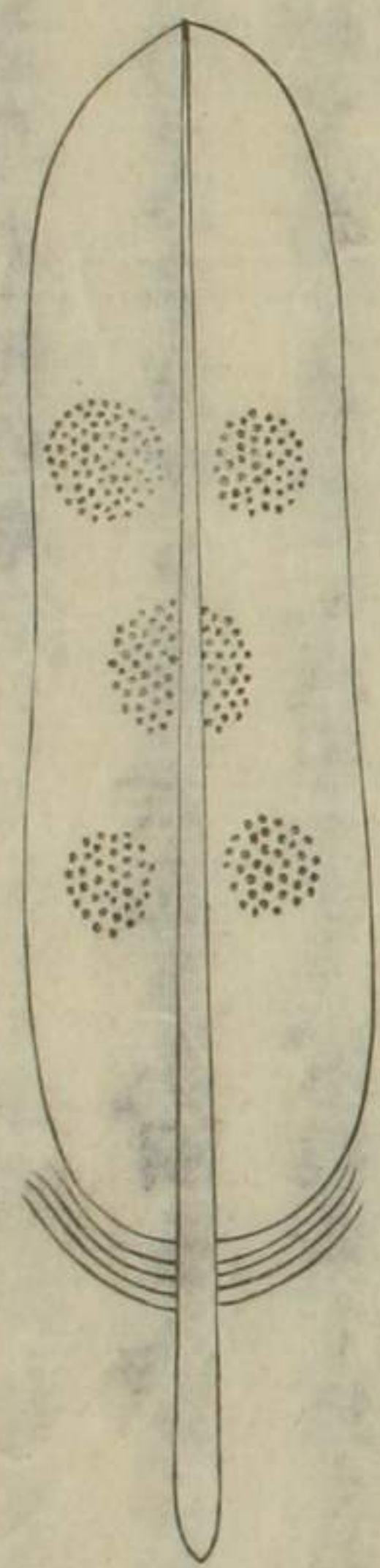
明か。の。羽。ハ。舞。樂。に。安。麻。の。舞。といふ。何。ぞ。此。舞。の。面。小。似。た
る。羽。を。あ。ま。の。面。といふ。あ。ま。の。面。ハ。紙。に。書。て。そ。れ
を。顔。よ。何。て。舞。ふ。なり。と。語。り。其。後。安。麻。此。舞。の。繪。を
見。に。た。む。り。あ。ま。の。冠。き。の。紙。に。書。た。る。面。を。顔。小
あ。ま。舞。ふ。體。を。画。り。其。繪。ハ。尤。小。寫。一。何。ら。の。ま。が。如。し。
按。む。り。海。人。の。面。も。拙。人。此。面。も。常。の。人。此。面。に。り。た。る。か
ら。む。形。も。あ。ま。の。れ。ま。て。といふ。ハ。海。人。此。面
此事に。ハ。あ。ま。の。り。安。麻。の。舞。此。面。に。似。せ。る。由。意。の
名。形。多。し。

安麻の舞



あまれおりて

右に舞の面小似た糸文ある羽を、何まのれりてといふべまの。
予が弟子蜷川親興が、松前の人蝦夷へ渡りて、取来りてあ
はれ面の羽を見し。尤れ繪圖にぞし。是を松前の人
あまれおりてといひ習はりて来るを語りて



右の羽は文上の二に星ハ舞の面はへふのふと下の三に

星ハ舞此面の▲ふかひどろまゝ。此羽を安麻の面と名付也
—小や

志きりただの事

近世志きりただとしてたゞ見ゆ小羽を八ッ付るなり。
その體とがやあごの如く。四ッ立より。小羽城を短くして。下
此方を何きて。其何きたる所小秋鳥カシドの羽を一寸二分計より。二ッ
付るあり。又一方此小羽の下れあたると所は。連雀レンシヤの羽
を一寸二分ばらより。二ッ付るなり。羽の數合せて八ッあり。
此をぶやう。室町殿時よ記したる古傳書どりたも。曾々見
えげ。事なり。況やそのゆより。以往の書も猶見え。近

世の新作物あり。かゝ鳥まん志やくなど矢は用ふる羽不
あらば。右羽をたやう用ふる事ある。秋志きりただとい
ふ。志きりただといふ事誤り。新作したるものなり。秀
郷草子より。志きりただといふ。白羽黒羽あはれは。志きりただを侍
とを申傳を。とあり。保安元曆の記ふ あの記文。近衛家熙公
抄出して。新井筑後守
小賜印 由軍 執柄供奉行幸の時。府生番長平胡ヒヤナシヒ録。尤ハ鷲シウ羽。
器考は載たり。右ハ肅慎羽。これを新調也。鳥鷲の羽を以て。三府ミフ小切續キを。
と何ぞ。是ハ古代肅慎シウシンと云國より出。羽城。肅慎シウシン此羽と云。
其羽まゝに。とあり。鳥と鷲此羽城以て。三府小志きりただ羽不
あ。ら。ば。肅慎の羽に似せざるなり。志きりただといふ。白羽

ふハ檀三三の木此あちのこみてはぐ形り。矢本秘傳ふ。やはまゆ
これうそ形也。白うはと是を云。又藤のかを毛用ふるを察。何
もかそハ六月土用のうちよまじく置形り。土用よ何うぞれ
ハ木のうは魚カがけらるるを毛と見えし。的矢ふは皮はぎ本式
なまじくはゆめこの皮あき時ハ。その代りに紙をたよま
形り。はゆめ此皮白き物さるゆ急まざらか。紙を用
ふるなるも。本式ふはあらじ

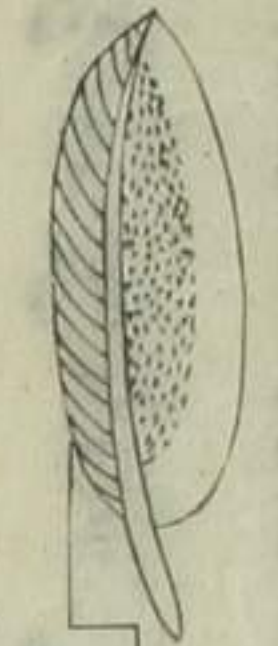
矢の羽成をやくぞ形取るといふ事

此をやくぞ形の事秘傳なりといふ説あり。秘傳もなき事
なり。本間流聞書云。角鷹クニタカの羽をたよれば白このゆかく

あるやうにゆかくし。是を此をやく花ふとあといふ形り。射御
拾遺抄。鷹の羽のかぶらふ毛用ふ成し。此をやくぞ形成羽さ
たへもあ成し。と何り按む。此をやくばあふ。此はぞだ
あ形り。此をやくといふゆえ。此れ事なる。田舎にさハゆく
成しといふり形さる。ひさぢの花も白きものなるゆ急
古ハ白きりのしたゆりハ。此をぞ花成し。あり。源平
盛衰記石橋山合戦の條に。與一が乗たる馬ハ。白あり。毛れふ
とくきくは。きか。七寸ナキハ餘り。鼻のさた此をよの花れ
如く白あり。名成あふ。名とゆふと見えきり。鷹の
羽を矢よまじに。羽されば白き所の何さうに羽とあゆ急。

花小と依といふを察ひてふとひふ詞轉じて云々
と形をくさるなり。水を汲むをばとを毛。云々やくといふハ同じ
例をり

まゝもだの事

高忠聞書に云。羽れをその方をまゝのりごとといふ。又のいそとを
云ふなり。  此方破スルモギといふ。まゝもだの事
を。今ハうひがごとといふ。是矢工の詞なり。射手方ハ用ひざ
るなり。

ス井ハロヤウハ
水破兵破の矢れ事

頼政の鏑矢ハ水破兵破といふあり。此矢家ハ相傳の矢とす也

志貴び重んじて。かくのおゆき名を付らるなり。源平
盛衰記より水破といふ矢ハ黑鷲の羽破以て名づ。兵破といふ
矢を山鳥羽に名づたりと見え。水破兵破といふ
名ハ羽を以て名付し。根のあやま。此名作るを以て名
付し。其心詳あらば。羽を以て名付し。なうらバ。黒羽ハ
水の色なれば。水羽の心歟。兵破ハ山鳥の尾斑マダラなれば。豹の斑毛ハ
もろく。豹羽といふ歟。詳なうらぞ。うら此事。強て説を作ふ
なうらば。疑し。ハ。闕カク。猥レロふ云ふなり。

神通の鏑れ事

神通の鏑といふ物。神通巻と号して。羽のまぎ系に紫系を用

ふ。是昔筑紫宇佐八幡ありて。天武天皇流鎬馬を射りて。一時
 是成用せらる。天子の御矢なるゆゑ紫系成用ふ。後には其
 色をうづめて。天武天皇系を赤漆にぬる。是を神通卷といふと
 此説用ふることを。天武天皇系を赤漆にぬる。是を神通卷といふと
 一事。日本紀をば。め正史實録り曾てたる事あり。
 以てみざるあり。説るを。又一説に神通鎬ハ朴木ホノキありて
 作也。目の所に角ありて鳥居を作してほり入るといふ。此
 外其ありて。やうさる。ありて。各秘傳口決ありて。
 諸説あり。皆一家の私説新説ありて用ふる
 に足らぬ。信むる事あり。神通は鎬の名ハ。田村草子不出

たり。古き物語をれども。やう此事ハ實事とを思はせむ。
 神通と云ハ佛家の詞あり。昔ハ佛法成信むる事甚し。か
 しゆゑ鎬矢を貴び称美して。神通の鎬と書をふたふと。
 大悲れ弓。智惠の矢なる。いふ類なる。信む。そのを實ふ其
 制作ありて。さまぐの造事成ありて。その
 形り。射手方ハ故實ハ曾てたる。近世の新作形り

神通の事

雁カリタ候ハ陰イシよりて鬼頭キドウと号し。鎬キドウを陽ヒナドウよりて神通ヒナドウといふ。是鬼
 神ハ隱語インゴなりといふ説あり。用ふる事なる。雁候を何ハ
 陰より。鎬ハ何より。陽とまゝ。ふやうやう形り

の陰陽五行の理を以て入らざる事あり。又鎬を以て神頭とす。事は何やまなり。かぶらと神頭と一物ふもあら。鬼頭といふ名曾ておれたるなり。又一説あり。神頭ハ神代より何れも由急神頭といふといふなり。是又用ふる事ふの事。神代よる八目ヤツメの鳴鏑カブラあり。日本紀ふも見えたり。神頭といふも此神代ふ有ること。正史實録も曾て見えぬ。按ぢるふおんどろハ實頭ジツドウなり。くら引目ヒキメ四目ヨツメふどの類ハ皆中成志をぬきく。空虚クウソと云ふものなり。おんどろハ中を志すぬの也。空虚クウソふせず。中を實シと云ふものなり。實頭ジツドウと名付し。おんどろハ實頭ジツドウといふのふくふゆ也。おんどろと

毛モウ志シといふもの。其詞ふ合とく。後ハ神頭滋頭磁頭銚頭矢頭ヤチおんどろハ文字を充チ字に書たり。おんどろハ故ハ雁侯の名れ事。雁侯と名づくる事ハ雁ハ足の指のまへハ水うさあると似たり。雁カはと名付くといふ説有り。用ふる事あり。足ハ水かきあるハ雁のみハ限らぬ。まぐ水鳥ハはる水うた有り。まぐといふを指のまへハまぐといふなり。或人の説あり。かまぐといふハおんどろハ蛙カマの股マタにまぐくする形なり。おんどろハかまぐといふ詞轉じてかまぐにたれ。かまぐハ轉小なり。おんどろハおんどろハおんどろ。その詞ハ付て雁カの字ハあ

て字は用を來まるとなりと云層を。此説發明ある説大衆

矢がりのゆゑの事

かぶらよまげたるかりやをむかやまるといひをばして。りゆら矢と云ひ。うづらよまぎら直ふ籠よまげたる矢か。ままるといふ形り。おれをまがりゆるといふハコノ事詞。なを唯りのやるとばけりいづし。まがやあたといふ子。細ある事な衆。高忠聞書ふまがやまるといふ事ハかぶら矢射て後やぐまかやまると矢射るをまがやをゆるといふあり。ふいまのりゆるといふ事ハ何れや。たかや。かぶら矢射て。二の矢よまがりやを射てあぐらハいふゆり。さゆた

跡部孫三郎狐を射たるふも。きりのそま。ひを尾へゆけと。かぶらよまき耳二つの間をむづうせて。二の矢よまごりゆたを以て。狐の生尾を射切たるふど。物語よまか。かやと見えり。まがやまるとまの字改いふ事ハ。かぶらとをらづといふ時の詞たり。物語此時の射手詞なり

丸根の事

高忠聞書に。征矢ありらるや。中根ハ丸根本よりと見え。丸根といふは。劔尻の如くまき。真中よ志のぶ矢付む。志がぶの所を丸くまき。まをいふれ也。是ハ籠の矢くばりふさげよ。も。矢がぬら出まると志のぶ矢立たるハ心よりらむ。ゆゑ

丸根を用ふる形あり。近世丸根とて



かくれお

少くむらたたく打く。先より又成付く。ものあり。是ハ昔の丸根よりらび。新作物をり

さむりの事 付定角

きむりといふ矢根を木にさすはく成本ホンと思ふを非形也。予先年紀伊殿の家臣渡邊宗冬が家より傳へし。古にきむりを見しに。きたむし。鐵より打む。もの形あり。其形丸の如し



ケタニ切タリ

形丸く長くして。木の棒結ぶゆゑ木棒といふと宗冬が語る。右のきむりの先ハこころせだ。平ヒラの方カタは切たるものなり。北條五代記に侍た。人ハ鐵炮をみかき。藥を何ハせ。弓の弦をさ。矢成作ヤキうつ木青木形カタとふく木鋒成削り。木キはまありびといふ。ハかき木キふく鐵の木棒此代りに作ま。成いふる多し。神保宗右衛門尉安富民部がりゆ。今朝箭負の夫河原より落失て着陣せ。候間。木鋒を少シ合力候へといひ。事。應仁記小見えきり。是ハ城の木戸矢倉を射。碑イサん為り。所望。さるる。木に作。さるる。北條五代記に見え。木

削りてそのハ、雜兵を射志らよとん為に用ふる。射捨れ
用意小まゝたるあてし。又宗冬の傳へし定角ヂヤウカクを見し。又
是も古物なり。形ハ右の木棒を四角にありたるも此
本を察し、此もさ記るべきなり。けしき切たり。

矢ぶくといふ事

矢ぶくといふ事。矢さけむは此事
矢ぶくといふ事。矢さけむといふも一事は也。高忠聞書
小云。鹿を射て矢ぶくといふ事。顔をあふのけて、何
と矢答成るるなり。又云。あくと矢ぶくといふ事をす事。鹿
に限る事。ハたうさなり。狩の時れ。犬追物聞書。小笠原兵部少輔
元長の記なり。

に。射手とて矢を射たるとは、射しき時、馬をそりて出し
て、弓手の方へむび然ゆき、高くれくと矢ぶくといふ。馬
城をゆき、あり。この矢を矢ぶくといふ。聲ハ高くらば、くうら
ば、少長めて、まゝなり。犬追物の諸書當用抄云。當流は、小笠原
をいふ。矢さけむといふ事。ゆめし。有べり。矢ぶくといふ可申
なり。云々。然き。室町殿の時代。小笠原家。小笠原の矢さけむ
といふ。矢ぶくといふ。矢さけむといふ。矢さけむとい
ふ。古より此詞なり。平家物語。頼政のぬえを射た。條り。
えり。やむ。矢さけむ。矢さけむ。矢さけむ。矢さけむ。射得る
といふ事。是ハ矢は、まゝ。あり。お。といふ。矢さけ

〇四季神書の卷上
〇四十八
ど形なり。夫木抄信實の歌なり。道お侍き那須の御狩の矢さけび
ふ。此の形ぬ鹿の聲ぞきこゆ。と見えそり。矢さけびといふ
い古言詞なり

墓目の事

墓目の音ハ、^{オト}墓^{ヒキ}此鳴聲に似るれば墓目と云ふといふ説何ぞ用ふる
事あるの哉。墓の鳴音と似たる事ありし。若似たるありた。墓
音^ゴ墓^ゴ聲^ゴなるべし。何とて目の字成付て墓目といふ
ゆゑなり。又一説は昔妖鬼出づ人をこり食ふ事ありし。か
山中より大なる墓出づ。かれをけ物を食ふ殺しけり。と
いふ。この墓目目の形をうりて墓目成作。妖怪を

を退ふ矢と云ふといふ説も何ぞ。とも不用ふる事なり。此昔と
いふ。何の時代哉。さういふ。ありむ。年号も時代
もなき。物語もこふた。たは。墓の妖鬼を食ふ事妄説
なり。墓目ハ妖怪を退くが為小作を始しにあらむ。物に
疵を付て射せふす。まが為の設なり。大なるも然なるゆゑ。
重くても飛ぶぬゆゑ。中成空小なるぬき。軽くても然る。中
を空小。も猶重きゆゑ。穴を何とく風に乗じて飛ぶ。小
た。み。も。は。れ。を。鳴。ら。せ。ま。が。為。小。穴。成。あ。る。た。ま。は。何
ら。だ。穴。ある。そのゆゑ。風吹入て自然り。鳴るあり。鳴音あ
るゆゑ。鳥獸是よれ。と。恐る。あり。た。け。物。の。み。怖る。

みはあらば。又一説は墓目此音ハ。十二調子ふたづまき。調子
あるゆゑ。妖鬼の類是を恐るゝといふ説あり。是又用ある
事なる所。およそ天地の間ハ音あり。是れさなづくの音あり
といふも。十二品を外したるまきゆゑ。十二調子を定たふ
を此れ也。然るも。墓目の音は。十二調子にもづも事有
らざらば。そのうへ十二調子よをばき。音ゆゑをそ
し。たといふ事を。なけ。ものいふ。誰か聞た。ふや。笑ふ
づも事なり。東鑑に引目此二字を用ひたり。其外古き書ハ
挽目曳目あづ。書るものあり。墓目と書くは限り。此
事なり。日夏繁高が武林原始。引目ハ響目此訓なる所

いといふ。發明の説なり。云々。か。中畧し。てひきめ
といふあり。其詞は付くさぬ。の字をあて字ハ書た
る。祭目といふも。穴此事あり。西土よて穴の事。眼と云り
同ト意なり。天工開物。佳兵篇。弧矢章曰。郷音箭。則以寸木空
中。錐眼爲竅。矢過招風飛鳴。即莊子所謂嚆矢也。と見え。の
も。明らかなり。此眼といふハ穴のことあり

墓目寸尺此事

墓目小定。寸法ハ。多賀高忠聞書云。引目の寸ハ
四寸なり。のみの定む。し。四寸と定置。ま。此と
大小の事ハ。弓は弓。ふ。り。て。も。ま。伊勢宗五入道
下総守平

貞頼 犬追物方聞書に云、曳目ヒキメの寸ハ定まらば、中引目ヒキメ此大小の事。人此弓勢イキよとるべし。以てその分イキは過グまを扱アくたも
可心得云々。又弓法私書小笠原持清之記云、引目此大小の事。是又古今
懸隔ヒキメなり。彼是愚意ヒキメにたれども、何きも不可然。其故も昔
様とて、四五寸の引目餘ヒキメに見所ヒキメなく覺也。よる當世様
とて、弱弓ヒキメよとるも、大引目も見小く覺ゆ。犬ヒキメに當てて矢
落もよからば、少し遠廻ヒキメる時ハ、力ヒキメ弱き風情も何れ
さぬ。昔の射手此中ヒキメ。今少引目大ヒキメをらば見所ヒキメ有ふん
と覺ゆ。とあり。今時の射手此中ヒキメ。今少引目ちひさ

くハ猶よのらん。と覺ゆ。とあり。餘ヒキメの大小共ヒキメ不可
然。但し人ヒキメよとり弓ヒキメよはべし。相違ヒキメなくハ一尺二尺ヒキメも
まべし。弓ヒキメよあまをく引目ヒキメのかわくも、城制ヒキメを所ヒキメなり。云々
とあり。右ヒキメ引所の書ヒキメどりも、室町殿時代記ヒキメしたる書あり。右ヒキメ古書の趣を以て、引目ヒキメ
定ヒキメる寸法ヒキメなり。事ヒキメ知るべし。今世引目ヒキメ此寸法定ヒキメるありやう
小思ヒキメふ人ヒキメ何り。故實ヒキメを知らぬ。かゝるあり。事ヒキメなり。

大具足の引目此事

近世大具足の引目ヒキメと名付て、長一尺二寸ヒキメ此引目ヒキメを作ヒキメて持
つ人あり。大具足ヒキメといふを、引目ヒキメの一種の名と覺たヒキメるハを、か
れ事ヒキメなり。犬追物ヒキメ此古傳書ヒキメどりも、大具足ヒキメとあり。大道具

といふ事あり。弓も強き弦引き。矢束を長く。引目も大なるを
射るゆゑ。さういふ射手を大具足の射手といふ。是古代の射手
詞あり。弓を強きハ大具足を。引目ハ大なる弦のハ大具足
ハ云ふ。さういふ。大具足ハ射手にさあらば。大引目を拵
へ置く事。何の用小立つる事ぞや心得ぐ。此事なり。

宿直引目の事

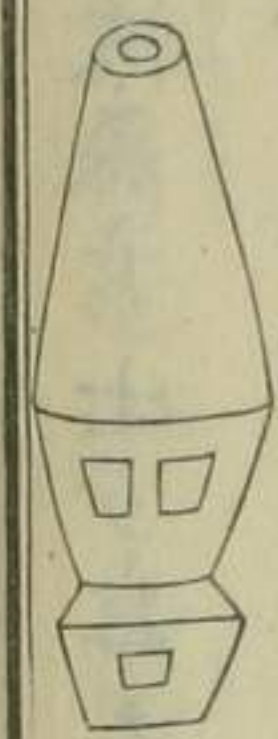
魔除の為。家此床の上り。引目を立おくを。この引目と云
ふといふ説あり。信トが。き事あり。宿直といふ。主君レ
館に。さういふ番を。さういふ事なり。と。さういふ番。さういふ人。用心の為
小夜引目を射る。鳴音。さういふ。と。さういふ引目といふ。なり。太平

記り。大森彦七が事を記したる條より。さういふ物ハ。引目の
聲。小恐り。なり。と。毎夜番衆を居て。宿直引目を射る。を。け
ま。と。見え。と。又義經記り。伊勢三郎が義經の臣。小初て
たる。條。人ハ。さういふ。と。さういふ。四天王のご。さういふ。男五
六人來。御客人をさういふ。奉。御用心。と。覺候。さういふ。ハ。弦
ら。候。御との。の。仕。さういふ。兼候。と。引目の音。弓
の。弦。さういふ。御との。の。仕。云。と。見え。と。
此外。さういふ。古き書り。この。引目。と。いふ。と。さういふ。番。と。夜
引目を射。事。なり。是。城。さういふ。と。さういふ。引目。と。いふ。引
目。さういふ。と。さういふ。と。て。妄作。さういふ。引目をさういふ。

座敷の床ふかざり置く人有り。かへはらひつた事なり。高忠
 聞書に。夜引目射るものは。犬射引目本ホシなり。けさやう此物ハ笠
 懸引目より。犬射引目小怖る。古申あらひ。さるなり。
 ちうき頃かのごんききもさう。おぼれたるを。見えたる。別ふ
 これぬ引目といふあ。らうやうハさき事なり。
 引目をり。黒くそさうよ
 ぬり。さふ引目をり

ほんぶら引目の事

近世ほんぶら引目といふもの有り。其形常此引目の如く
 引目。引目頭の方。又小き引目を作て付た家も多あり。
 其形



圖のごんききもの形なり。こま何の用なり

立つもれぞや。此もれ室町殿時代小記。たる古傳の書ハ。曾
 ちうきもの形なり。按ぶる。前又記。ちし。所れまんぶら弓
 といふ弓あるより。ほんぶらといふ矢を。新作し
 た。家も。ほんぶら。射手方の故實ハ。え
 曾てなれもの形なり。用ふる。あは。のま

四季艸一之卷 春草上 終

